



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	貨幣論の方法:『資本論』体系における世界貨幣の論理について
Author(s)	降旗, 節雄
Citation	北海道大学 経済学研究, 13(3,4), 147-177
Issue Date	1964
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32274
Type	departmental bulletin paper
File Information	13(3)(4)_P147-177.pdf



貨幣論の方法

——『資本論』体系における世界貨幣の論理について——

降 旗 節 雄

は じ め に

われわれはさきに、『資本論』第1巻、第1篇、第3章「貨幣または商品流通」について、『経済学批判綱要』から『経済学批判』をへて『資本論』への成立過程をたどりながら、その理論構造を、主として、貨幣の形態規定の展開と商品流通の構造的変化に焦点をあわせつつ考察した。¹⁾

この考察においてえられた結論は、貨幣の形態規定の展開は、論理的に形成されつつある商品流通自体の構造的変化の反映として、あるいはその結節点として処理されるべきであって、すでに完成された商品流通を前提としてその内部におけるさまざまな貨幣機能を並列的にとりだして規定するという方法はとられるべきではない、ということであった。『資本論』における貨幣論の展開は、基本的には前者の方法においてその概念規定の序列的編成があたえられているといってよいが、しかしその規定の内部にたちいってみると、流通形態規定をただちに生産過程によって媒介された物質代謝の特殊形式として、したがって一般に商品流通をいわゆる投下労働にもとづいた価値どおりの商品交換の過程として処理するという方法にささえられて、むしろ完成された流通界から機械的に諸種の貨幣機能を抽出して形式的に分類するという結果をもたらしている。

『資本論』における貨幣論から、後者の形式的分類乃至機械的抽象の方法を完全に排除することによって、流通形態としての貨幣の規定を純粹に展開し、原理論体系の内部に正しく位置づけようとしたのが『経済学原理論・上巻』（鈴木鴻一郎編）第1篇、第2章「貨幣」の基本的方法であった。

もとよりこれは多くの欠陥をふくむであろう一つの試論にすぎない。以上の方法を前提としたこの「貨幣」の章の展開について、日高普氏による、まったく反対の方法的視角からする批判²⁾があったので、これを対象としながらふたたび以下にこの問題についての方法的省察をおこないたい。

1) 拙稿「商品流通と貨幣」(鈴木鴻一郎編『貨幣論研究』所収)

2) 日高普『経済原論・上巻』41～2頁。(以下『原論』と略称する。)

1

まず問題点を概観しておこう。

『資本論』では、その第1巻、第3章、第1節「価値の尺度」の冒頭において「金の第一の機能は、商品世界にたいし、その価値表現の材料を提供する点、あるいは諸商品価値を質的に同等で量的に比較されうる同名の大いさとして表示する点にある。かくして金は価値の一般的な尺度として機能するのであって、独自の等価商品たる金がさしあたり貨幣となるのは、この機能によってにほかならない」¹⁾と規定している。つまり価値形態論の展開の成果として貨幣形態が完成すると、この形態的関連の内部で同時に金は諸商品に対して「価値尺度」として機能するというのである。マルクスはこのように貨幣商品金が価値尺度として機能しうる根拠を「すべての商品は、諸価値としては対象化された人間的労働であり、したがって絶対的に較量されうるものであるがゆえに、すべての商品が、それらの諸価値を同じ独自の商品で共同的に度量し、かくしてこの商品をそれらの諸商品の共同的な価値尺度または貨幣に転形することができるのである。価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的な価値尺度たる労働時間の必然的な現象形態である」²⁾という点から説明している。

さてこのように貨幣の価値尺度機能を、諸商品の貨幣形態における一般的等価物たる点、つまり価格表示の材料となる点にもとめ、したがって「価値尺度という機能においては、貨幣は、ただ表象的、または観念的な貨幣として役立つ」³⁾とする価値尺度機能の把握は、しかしながら商品経済において

商品が貨幣によってはじめてその価値を尺度される特有の機構の把握をまったく見失った視点にたつものといわざるをえない。なぜなら、この価値尺度機能の前提となっている、諸商品の観念的な価値表示というのは、諸商品所有者の私的な、したがって恣意的にして個別的な、一方的な価値表示の宣言にすぎないのであって、簡単な価値形態から貨幣形態までの価値形態の発展過程において、価値表現の機構が総体的・統一的な社会的関係のうちに、より客観的な機構として形成されてくるとはいえ、そのような価値表現の私的性格は、けっして根本的に止揚されることなく一貫して維持されつづけるのであって、むしろ価値形態の完全な発展形態としての貨幣形態においても根本的にはかかる価値表現の私的・個別性格が貫徹されざるをえないということが、商品経済の特有のメカニズムの本質をなすのであり、このことがまた貨幣の側における「一般的な直接交換可能性」⁴⁾の基礎をなすのだからである。つまり、このような商品世界の私的・個別性格が、その「非直接交換可能性」⁴⁾の根拠をなし、これが逆転して貨幣における「一般的な直接的交換可能性」の根拠をあたえることになっている。かくて商品世界の私的・個別的な価格表現の集合が、商品世界の価格関係としてあたえられるとすれば、この価格関係に対する「一般的な直接交換可能性」にもとづく現実的な統一的・総体的社会関係への編成過程こそ、貨幣の購買手段としての現実的出動にはかならない。この貨幣による諸商品の購買過程をとおして、私的・個別的な価格関係の集合は、はじめて社会的な価値承認をうるものであり、この過程をとおしてはじめて現実的な総体的商品世界へと編成変えされてゆくのであり、私的な価格表現関係としての商品世界は、社会的な価値関係にもとづく商品流通へと形成されていくのである。

貨幣が商品の価値を尺度するというのも、じつはこのような貨幣による現実的な商品の購買行為をとおして、商品の私的な価値表現を社会的な価値関係へと転換せしめていく過程をはなれてはありえないのである。

マルクスのばあい、さきにみたように「価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的な価値尺度たる労働時間の必然的な現象形態である」⁵⁾という視点

から、諸商品の特殊商品金による価値表現としての等質化を、直接「対象化された人間労働」による「絶対的較量」の過程と等置するため、この観念的な貨幣による価値表現過程と、現実的な貨幣による購買過程をとおしての社会的な価格水準決定過程との差異を理論的に区別することが不可能となり、価格表現に材料を提供する貨幣商品金と区別された、現実的な購買過程をとおして私的な価格表現を社会的な価格水準へと均衡化せしめる貨幣の機能を範疇的に自立化して認識することが不可能となったのである。

もちろんマルクスも観念的な形態において価値表現の材料を提供する貨幣の機能と、現実的に商品を購入するための「購買手段」⁶⁾としての機能とを区別している。しかし後者は、実は「商品の姿態変換」の過程における「流通手段」としての貨幣の機能の一段階として規定されているのであって、「 $W-G-W$ 」——「質料の内容からみれば、この運動は $W-W$ であり、商品と商品との交換であり、その結果のうちへ過程そのものが消失するところの社会的労働の質料変換」⁷⁾——における形式的媒介過程の後半の段階としてとりあげられているにすぎない。つまりこのような流通手段の一面としてとらえられた「購買手段」にあっては、その機能は社会的再生産過程の流通表面としての $W-W$ の過程の内部に解消せしめられて、私的・個別的な価格関係の社会的価値関係への転換過程においてしめる特有の役割は見失われることになるのである。このような観念的なものとしての価値尺度機能の把握と、購買手段の機能を流通手段のそれへ埋没せしめる観点とは、商品関係をすでに形成された「社会的生産有機体の量的編成」⁸⁾の形式的側面とする認識によってもたらされた同一事態の表裏にすぎないが、これはもともと古典経済学の商品経済把握の基本的立場であって、それがマルクスによってうけつがれて、労働価値説にもとづく価値実体把握を直接単純な流通関係自体において検証し、確認するという方法においてかれの『資本論』の内部に導入せしめられたものであった。

したがってかかる観念的な価値尺度機能把握の視点は、同じ『資本論』における価値形態論の展開による貨幣の必然性の論証と、根本的に対立する異

質な方法たらざるをえないのであって、このような方法的混乱を整理して価値形態論の純粋な展開を遂行し、その成果を前提としつつ貨幣の現実的な購買過程においてその価値尺度としての機能を規定したのは、周知のように宇野弘蔵教授による『資本論』の『経済原論』としての再構成のさいの基本的修正の一つをなすものであった。そして日高氏もまさにこの点において「宇野『原論』の功績」⁹⁾を認められるのである。

さらにまた日高氏は、この観念的なものとしての価値尺度機能の把握について、「このようなマルクスの考えは『資本論』のはじめに実体を説いたことからきていることは疑いない。ここですでに商品の価値の大きさが実体との関係のうえで規定されてしまうため……、価値表現と価値尺度のあいだの重大なちがいが見落されたのである。しかしこのちがいこそ、商品形態のもつ中心的な問題の内容をなすのであって、この点を誤解すると、労働価値説によれば価値の尺度は労働なのだというような素朴なまちがいに落ちることになる」¹⁰⁾として『資本論』における価値尺度規定の欠陥の根拠を説明している。

しかしこの説明は、価値実体の規定を冒頭の商品においてあたえるならば価値形態の展開は不可能となり、したがって貨幣商品による価値尺度の機能も把握できなくなるとして、形態的展開にさきだって実体規定をあたえることの欠陥を一般的に衝いたものではあっても、このような根本的欠陥が、価格表現としてあたえられた抽象的な商品世界を、一定の価格水準をもった商品流通世界へと編成していく過程において、具体的な貨幣機能と商品流通とのかかわりあいをとおして、どのように発現せざるをえなかったかを解明したものとはいえない。というのは、このような購買手段としての貨幣がくりかえし機能することによって形成される商品流通は、価格表現をなす抽象的商品世界と対比すれば、流通し価格水準を形成しつつある現実的商品世界といっていえば、しかし他面ではなお商品流通世界として完成された統一性において措定されているとはいいいがたいからである。すなわち、貨幣は現実には購買手段として、したがって価値尺度として機能しつつ商品流通を形成するこ

とになり、この商品流通においては貨幣はぎゃくにその流通手段としての量的規制を、商品流通によってあたえられざるをえなくなるのであるが、商品流通の変動に応ずる流通手段の量的変化は、さらに、たんなる購買手段でもなければ流通手段でもない、独立した価値物として流通に対立する「貨幣」の存在なくしてはおこりえないのである。したがって購買手段によって形成される流通界も、貨幣としての貨幣の媒介をとおして形成される流通界に対してはなお抽象的な流通界でしかない。流通界として変動しつつあることを前提されているとしても、その変動の具体的機構から捨象されているという意味において抽象的なのである。

そしてこのような抽象的な流通界が、自立的な貨幣としての貨幣に媒介されつつ、現実的な流通界として形成されていく過程が、とりもなおさず、貨幣としての貨幣の範疇的展開としてあらわれることになるのである。

ここで考察される商品流通は、当然その背後における生産過程も消費過程も捨象された流通それ自体としてあらわれる以外にないのだから、変動しつつある流通界といっても、一定の時点における商品流通と別の時点における商品流通とを同一の流通界の変動過程として把握することは不可能である。これを連続性においてとらえようとすれば、当然この実際には異質な流通諸断面が、それ自体独立した価値物によって媒介される過程において把握せざるをえないことになるであろう。ということは、じつは流通界を流通界としてその連続性において統一的に把握しようとするかぎり、「貨幣」を媒介とする異質な流通諸断面の相互関係として把握する以外にないことをしめしているのである。

購買手段によって形成される流通界とは、じつはこのような意味での流通断面にすぎなかったわけである。つまり現実的な変動媒介の機構を捨象した流通界としては、それは、それ自体としては時系列においてとらえられようと、空間的にとらえられようと、分断された流通断面の集合にすぎない。そして流通断面としての流通とは、じつは商品流通の自己否定にはかならないだろう。何故なら、商品流通とは、本来連続性を欠いては存在しえないもの

であるからである。商品流通を「貨幣」の媒介なしで、しかも商品流通としてとらえるということは、こうしてそれ自体方法的な矛盾をはらんでいるのである。

ここでいう方法的矛盾とは、いいかえれば流通手段によって媒介されたものとして商品流通をとらえるということは、「貨幣」によって媒介された商品流通を前提としながら、しかも「貨幣」による流通の媒介を捨象して、商品流通をそれ自体としてとらえるという点をさしている。そしてかかる矛盾とは、たとえば貨幣との関連なしでは商品たりえない商品を前提としながらしかもこの貨幣との直接的関連を捨象して商品形態を純粹に把握するというのと同じく、いわば経済学の方法に一般的に内在する矛盾であって、その点からいえば商品流通の構造自体に内在する矛盾の論理的反映にすぎないといっていよいであろう。

だから「貨幣」の機能を媒介として、流通界が流通界として現実的に完成されていくといっても、この過程は、すでに流通界としてできあがった商品流通が、別の商品流通と関連することによって、さらに複雑な流通界を形成していく過程として具体的に想定されてはならない。ちょうど価値形態の展開過程を物々交換の発展過程として表象することと同様に、そのような想定は常識的にはうけ入れられやすいのであるが、そして日高氏も指摘されるように『資本論』でもこのような視点は「曖昧ながら存在した」¹⁾といっていよいであろうが、しかし厳密な理論的規定としては、そのような想定はとりえない。

したがってここで、一面ではすでに流通手段を媒介として成立した商品流通が、他面ではさらに「貨幣」の媒介をとおして具体的に完成されていく過程としてあらわれる「貨幣」の範疇的展開を、商品流通との関連でいかに論理的に規定すべきであるかという点にかんして立入った考察が要請されることになる。

1) K・マルクス『資本論』青木文庫版① 205頁。(以下『資』と略称する。)

2) 『資』① 205頁。

- 3) 『資』① 207 頁。
- 4) 『資』① 166 頁。
- 5) 『資』① 205 頁。
- 6) 『資』① 236 頁。
- 7) 『資』① 223 頁。
- 8) 『資』① 225 頁。
- 9) 『原論』 26 頁。
- 10) 『原論』 26 頁。
- 11) 『原論』 41 頁。

2

われわれの「貨幣」論の方法にたいする日高氏の批判は次のようである。

「流通圏外にでた貨幣は、具体的には国際間に機能する貨幣として、単なる流通手段としてではなく、商品交換の取引差額にたいする支払手段としてあるいは原始的な購買手段として、さらにまた時には賠償金等にみられるように富を移転する手段として、機能する。『資本論』や宇野『原論』がこうした機能をのべているのは、世界貨幣を、複数の流通圏を結ぶものとしてとらえる視点が、曖昧ながら存在したためであろう。この点を一そう徹底させ明確にしたのは『原理論』であって、価格体系を異にする複数の流通圏を結びつけるという考えを中心にすえて世界貨幣が説かれている。このことは、商品形態の、旧来の生産関係にたいする外的な性格を強調し、世界市場的性格をもったものとしての資本主義を分析しようとする、この書に一貫した敘述態度からきたものであろう。このような根本的態度につらぬかれると、特に『貨幣としての貨幣』から『資本』への展開は、資本主義生成史の理論化という内容をおびざるをえず、論理の展開は、単なる論理の展開ではなしに、歴史的事象の助けを借りなければならなくなるであろう。例えば諸流通圏の間で価格体系が異なるというようなことは、商品形態の分析から始まる論理の展開としてでてくるはずがない。はじめから生産にたいする商品関係の外的性格を強調することによって、暗に商品にとって外的な存在としての生産を前提せざるをえなかったゆえんである。商品が共同体と共同体の間にはじまったということはけっしてまちがいでないのだが、むしろ資本主義社会

の分析をとおして、とくに『恐慌の必然性』において明らかになる商品形態の特質が、原始的には商品が共同体と共同体との間にはじまるという事実を類推させるのであって、商品形態の生産にたいする外的性格は、歴史的に前提されるのではなしに資本主義社会の分析の結果として得られるものでなければならぬであろう。したがって原理論の展開は資本主義生成史ではなくて完成された資本主義社会における最も単純で抽象的なカテゴリーの分析からはじまる論理的なものでなくてはならない。したがって世界貨幣も、諸流通圏を鳥瞰するような姿勢からでなく、あくまでひとつの流通圏の内部からの姿勢で説かれなければならない。だから流通圏の外部からはいつてくるといときも、ほかの流通圏からであってもまた圏内の生産からであっても、その区別は問わないのである。むしろ本来的には、世界貨幣の世界とは実は資本主義社会の内部に存在するものと考えた方がよい。国際的な機能をのべなかったのもこの理由によるのである。」¹⁾

日高氏の批判の焦点は、『原理論』において「価格体系を異にする複数の流通圏を結びつけるという考えを中心にすえて世界貨幣が説かれている」点である。これは「完成された資本主義社会における最も単純で抽象的なカテゴリーの分析からはじまる論理的」展開を「たんなる論理の展開ではなしに歴史的事象の助けを借り」た「論理の展開」へと不純化させるものであるというのである。何故なら日高氏にあっては「諸流通圏の間で価格体系が異なる」というようなことは、商品形態の分析から始まる論理の展開としてでてくるはずがない」と考えられるからであった。

しかし「諸流通圏の間で価格体系が異なるという」ことは、あるいはさらにさかのぼっていえば、そもそも「複数の流通圏」が存在するということは、論理的展開においてはそれ自体として設定しえない事態なのであろうか。

すでにみたように購買手段としての貨幣によって形成される商品流通にあっては、その商品流通としての連続性と自立性とは、流通手段としての貨幣の量的規制を商品流通自体の運動が一方的にあたえうという点に表現されていた。つまり「それぞれの期間に流通手段として機能しつつある貨幣の総

量は、一方では流通しつつある商品世界の価格総額によって規定されており、他方では……かの商品世界の対立的な流通諸過程の流れの緩急によって規定されている」²⁾ のであって、これは商品流通が流通手段としての貨幣に媒介されつつも、しかもこの流通手段の変動を自己の運動のたんなる内的契機とするところの統一的商品流通世界として自立的に自己を形成していることを意味するものであった。流通手段としての貨幣にあっては、「貨幣の機能的定在がいわばその物質的定在を吸収する」³⁾ ことによって、最終的にはそれ自体無価値な「紙製の象徴」さえ生みだしうる根拠もここにあった。

しかし商品流通はこのようなものとして、その自立性と統一性とを完成しうるものではない。商品流通による一方的な流通手段の量的規制さえ、その具体的機構としては、たんなる流通手段としての貨幣の規定をこえた貨幣としての貨幣の介入によってはじめて逐行されうるものが、それをしめしている。商品流通の統一性と自立性とは、かくて、その外部において商品流通と対立する価値の自立的存在としての貨幣に媒介されてはじめて現実的機構としてあたえられることになり、このことはとりもなおさず、たえざる変動をとおして一定の価格水準を形成する統一的商品世界としての商品流通の現実的措置は、「貨幣」の規定の展開においてはじめてあたえられることを意味する。

個別的には無限の蓄蔵の過程としてあらわれる蓄蔵貨幣の形成と、直接的には現実の貨幣の媒介なしに商品流通を拡大せしめる支払手段としての貨幣の機能とは、このような商品流通の現実的な商品流通としての確立過程の貨幣範疇における反映を意味するにすぎない。

しかしこの蓄蔵貨幣にしろ、支払手段としての貨幣にしろ、もともとすでに商品流通内部において流通手段として機能し、したがって特殊の商品の現実的転化物たる一般的富としての規定を流通自体によってあたえられたことを前提として、そのうえでいったん流通との直接的関連から分離されて、外部から流通に対立しつつ、一般的富としての価値の自立性を維持しているのである。つまり蓄蔵貨幣はもちろん、支払手段としての貨幣も、「交換価値

の絶対的定在または一般的商品」として「流通にはいっていく」⁴⁾のは、当然それ以前にいったん流通からひきあげられる過程が存在することを前提しなくてはならなかった。

ところが、世界貨幣においては流通との関係はまったくこれと異なる。世界貨幣は、もともと、流通の内部において諸商品の現実的転化形態たる「一般的商品」たる規定をうけることなしに、直接的に流通外において「交換価値の絶対的定在」として機能することになるのである。もちろんこのばあい流通手段としての貨幣が絶対的に流通から歩みでることによって世界貨幣たるばあいもあろう。しかし『資本論』でも「貨幣は国内的流通部面から歩みでるとともに、価格の度量基準・鑄貨・補助鑄貨・および価値標章という、そこで生成する地方的諸形態をふたたび脱ぎすてて、貴金属のものと地金形態に逆戻りする」⁵⁾とされているように、この世界貨幣の「富一般の絶対的・社会的な物質化」⁶⁾としての基本的性格は、すでに流通によって付与されたものではなく、流通との根本的対立において規定されているのである。このことは蓄蔵貨幣乃至支払手段にあっては、それ自体「交換価値の唯一十全な定在」であるとはいえ、なお「この機能が金自身によって果たされるか代理者によって果たされるかを問わな」⁷⁾かったのに対して、この世界貨幣にあっては、このような「代理者」による代替関係は絶対的に排除されているという点において具体的にしめされている。

もっとも『資本論』では、このような蓄蔵貨幣乃至支払手段としての貨幣と、世界貨幣とが機能するそれぞれ異った流通界の差異が、直接に「国内流通部面」と「世界市場」として具体的に表象されているのであって、この「国内流通部面」と「世界市場」とがさらにどのような論理的構造の差異において規定されているかはまったく不明である。そしてこの点が、日高氏によって「論理の展開」を「単なる論理の展開としてではなしに歴史的事象の助けをかり」た「資本主義生成史の論理化」としてとく視点として、排撃されたのであった。たしかに『資本論』におけるように、この流通手段および蓄蔵貨幣乃至支払手段の媒介する流通と、世界貨幣の媒介する流通とを、ただ

ちに「国内流通部面」と「世界市場」として表象することは、「完成された資本主義社会における最も単純で抽象的なカテゴリーの分析から始まる」原理論体系の展開とはまったく相容れない方法としなくてはならないであろう。なぜなら「完成された資本主義社会」にあっては、当然あらゆる社会関係が資本家的生産様式によって支配されることによって資本と労働との完全な流動化が保証されており、したがってそれ自体としてはその内部に国家やそれにもとづく政治的・法律的、その他諸々の上部構造からする規制をもたない純粋な下部構造の運動機構が、そしてそれのみが展開されることになっており、それゆえそこでは国際的分裂と対立に基礎づけられた経済的関係は完全に捨象されているはずだからである。

しかし商品流通の構造を、流通手段および蓄蔵貨幣乃至支払手段によって媒介される流通と、世界貨幣によってむすばれた流通とに区別すること自体は、ただちに商品流通を「国内流通部面」と「世界市場」として具体的表象することを意味するものではない。もともと蓄蔵貨幣と支払手段としての貨幣の規定を流通手段の範疇を展開した後でとくことは、一応流通手段によって運動せしめられている商品流通がこの蓄蔵貨幣や支払手段の媒介をとおしてはじめて商品流通としての統一性と連続性を確保し、自立的商品流通として自己を確立することをしめしているのであるが、世界貨幣の規定は、さらにこのような商品流通がじつはこの世界貨幣の媒介によってはじめて機構的に完成されうるものであることをしめしているのである。つまり『資本論』のいわゆる「国内流通部面」と「世界市場」とは、かかる意味での商品流通の形成過程の段階的差異をあらわす論理的範疇としてとらえられねばならなかったのである。

流通手段および蓄蔵貨幣乃至支払手段の媒介する商品流通は、当然一定の価格水準にささえられて一定の量的範囲をもつ商品流通の現実的運動機構としてあらわされるが、このような商品流通に対して世界貨幣はまったく流通の外部においてこの流通に対立する。そしてこの一定の価格水準（ここではこれが価値関係なのであるが）に対して内的関連をたちきられた外部世界に

における世界貨幣を媒介とすることなくしては、この商品流通の統一性と連続性も機構的に完成されえないことが、この世界貨幣の規定において具体的に表現されるのである。ここで商品流通の商品流通としての統一性と自立性なるものは、じつは商品流通に対立する外部世界に媒介されることによってはじめて完成されうるという関連において、これまでの商品流通の非自立性と非統一性が暴露されるのであり、流通手段や蓄蔵貨幣乃至支払手段によって媒介された商品流通なるものは、根本的には限定された範囲と特定の価格水準によってささえられたところの部分的商品流通にすぎなかったことが露呈するのである。

「世界市場ではじめて、貨幣は、十分な広がりにおいて、その自然形態が同時に人間的労働それ自体の直接的に社会的な実現形態たる商品として、機能する」⁸⁾ という『資本論』の規定は、一面では「世界市場」を具体的な「国内流通部面」との関連において表象し、他面では「人間的労働」を直接前提することにより流通形態としての純粋な規定性が実体的関連によって混濁されているという欠陥は有するとはいえ、まさにこのような商品流通の非自立性と非統一性に対する世界貨幣の媒介を基礎とした、商品流通の世界市場としての完成の過程を闡明するものであった。「世界市場ではじめて貨幣は十分な広がりにおいて」「交換価値の唯一十全な定在」として規定され「貨幣の定在様式が貨幣の概念に適合したものとなる」ことによって、同時にいまや非自立的な商品流通——したがっていまやこの「世界市場」的関連からふりかえてみるならば、たんなる非統一的な部分的商品流通にすぎない商品流通——は「世界市場」の部分的構成要素としての「商品流通」として位置づけられることになる。つまり商品流通は、たんなる商品流通としては、その統一性と自立性を確保しえず、世界貨幣によって媒介される世界市場的関連の内部に位置づけられることによってはじめて、その商品流通としての完成をみることになるというこの論理的構造のうちに、流通手段・蓄蔵貨幣・支払手段という貨幣機能によって形成された商品流通は、いまやたんなる部分的商品流通として、その価格水準の形成と維持とを根本的には世界

市場内部における世界貨幣を中心とした総体的商品流通の編成過程のうちにもとめざるをえないことが論証されることになるのである。

かくて、世界貨幣の媒介する世界市場における商品流通とは、論理的にはそれぞれ分断され、限定された範囲をもちつつ、特定の価格水準によって規制された部分的商品流通の集合体として規定されることにならざるをえないのである。

すなわち日高氏の見解とはぎゃくに、「諸流通圏の間で価格体系が異なるというようなことは、商品形態の分析から始まる論理の展開として」必然的に「でてくるはず」である。しかもこの「論理の展開」は「単なる論理の展開」として「歴史的事象の助けを借りないで「でてくる」のであって、このような「論理の展開」を純粹に逐行することをさまたげたものは、じつは日高氏にあっては『資本論』におけると同様に、商品流通が流通手段の媒介によって形成されると同時に、一定の「価格体系」をもった「ひとつの流通圏」として完成され、「貨幣」の諸機能はたんなる流通手段の量的調節のツールとしての意義しかあたえられていないという、商品流通と貨幣の把握の視点にほかならなかった。

『資本論』では、もともと、「自己の分散した諸環を分業の体制において表示している社会的生産有機体の量的編成」の商品経済的形態に蔽われた、いわば社会的物質代謝一般の流通形態の側面として、つまり完成した社会的再生産過程の商品経済的表現として、商品経済が完結的に把握されており、このような商品流通の把握が、一面では貨幣の価値尺度における独自の機能を観念的な価格表現の關係に埋没せしめるとともに、他面では「貨幣」の諸規定の理論的展開をたんなる流通手段の量的調節の諸機能へ解消せしめるという結果をうんだのであった。

このような流通關係の、したがって商品の把握は、さらに立入っていえば日高氏の批判されるように、『資本論』における価値形態論に先だってあたえられた労働価値説の直接的な前提、商品流通の背後に想定された単純商品生産の構想にその把握をもつことはいうまでもない。しかし日高氏とともに、

このような形態規定に先だつ実体概念の無媒介的前提、単純商品生産の想定を『資本論』体系から排除することによって、流通形態を流通形態としてそれ自体で純粹に規定しようとするならば、われわれは当然同時に、流通手段によって媒介された商品流通を、一面では一定の価格水準を形成しつつ自立的に運動する統一的流通世界として積極的に規定しつつも、他面では、その自立的運動の具体的媒介をこの流通の外部において独立した価値物として流通に対立する「貨幣」にもとめざるをえないという点でなおその統一性を消極的にしか達成しえていないものとして把握せざるをえないであろう。この商品流通として一面では統一的に形成された商品世界が、世界市場的関連において露呈するそれ自体としての商品流通の非自立性と非統一性とは、もともと商品がそれ自体価値として規定されながらその価値の現実化のためにはその内部から特殊の商品を一般的商品として外部に析出し、この外部の価値物との関連においてしか価値を実現しえないという特有のまわり道を必要とした論理過程の、発展した形態でしかない。つまり商品が商品として現実的に自己を措定しようとするかぎり、自己の内部から析出した他者としての貨幣との関連においてその具体的規定性を展開せざるをえなかったように、商品流通が商品流通として現実的に自己を確立しようとするならば、その外部における「貨幣」との関連において具体的運動機構を展開せざるをえず、前者の理論的歩みが商品形態論（『資本論』では「価値形態」論）として総括されることによって商品世界からの貨幣の必然的成立を解明したとすれば、後者の理論的展開は貨幣形態論（『資本論』では「貨幣または商品流通」）として規定されることによって、まさに商品流通、したがって貨幣からの資本の必然的成立を論証することになるのであった。

- 1) 『原論』 41～2 頁。
- 2) 『資』 ① 245 頁。
- 3) 『資』 ① 257 頁。
- 4) 『資』 ① 267 頁。
- 5) 『資』 ① 277 頁。
- 6) 『資』 ① 279 頁。

7) 『資』 ① 253頁。

8) 『資』 ① 277頁。

3

商品形態論の展開が貨幣の必然性を論証するのにたいし、貨幣形態論の展開はその帰結として資本の必然性をみちびきだすものであるとすれば、貨幣の諸機能の——あるいはまた貨幣の諸規定が商品流通の諸関連のその結節点における反映にすぎないものである以上、商品流通の——論理的措定が正しくおこなわれないあいには、当然、資本の必然性の論証過程が不明確となることは避けられないであろう。

『資本論』では、すでに流通手段に媒介される商品流通の規定において、全面的な社会的物質代謝の流通表面として完成された商品流通を想定し、蓄蔵貨幣や支払手段としての貨幣は、この流通手段を量的に調節する意味しかあたえられていないため、世界貨幣の考察部面においては、理論的規定としての商品流通は「一共同体の境界によって劃された・すなわち国内の流通部面」¹⁾として、具体的な「種々の国民間の質料変換」²⁾の場である「世界市場」との関連において把握されることになっている。そしてこのことが「商品流通の質料的内容たる相異なる諸使用価値の交換を度外視するならば、そしてこの過程の生みだす終局的諸形態のみを考察するならば、われわれは、この過程の最後の産物として貨幣を見出す。商品流通のこの最後の産物は資本の最初の現象形態である」³⁾として、「商品流通」を「資本の出発点」におく視点をとらせるにいたったのである。ところがこのような「商品流通」と「世界市場」との関連設定の前提となっている「商品流通」の「国民的部面」における完成した物質代謝の流通表面としての把握は、同時に「ここでは現象が純粹に考察さるべきであり、かくしてその正常的経過が前提さるべきである」⁴⁾という方法に裏づけられて、いわゆる投下労働価値説にもとづく価値どおりの交換が逐行される流通部面として想定されていた。

こうして「貨幣としての貨幣」と区別された「資本としての貨幣」 $G—W—G'$ の理論的導入は、当然一方では貨幣の概念に完全に照応したいわば完

成した貨幣としての世界貨幣と、それが現実的に機能する「世界市場」との関連においてあたえられねばならぬという論理的要請が帰結されるのに対して、この世界貨幣の設定の理論的前提となっていた等価交換によって規制された商品流通の内部においては、かかる要請は絶対にみたしえないものとして、ここに一つの論理的ジレンマが形成されることになったのである。したがって『資本論』では、「貨幣としての貨幣」と区別された「資本としての貨幣」の理論的展開は「貨幣としての貨幣」の成立の前提となっている完成された単純流通においてはあたえられえず「剰余価値」が「形成されるにさいしては、流通そのもののうちでは目にみえない何事かが流通の背後でおこらざるをえない」⁵⁾として一挙に、生産過程を媒介とした価値増殖形式としての産業資本へと考察の対象領域を転換せしめることになる。これが『資本論』第1巻、第2篇「資本の貨幣への転化」であたえられている展開の全内容であった。

つまりこのような論理構造にしたがうかぎり、一面では世界貨幣の規定は日高氏が批判されたように、現実的にあたえられた「国内流通部面」から「歩みで」て具体的な「世界市場」において「国際間に機能する貨幣」の諸機能を列記する以外にないことになるとともに、他面では商品流通の「正常な経過を前提とする」原理論体系の内部では、「資本としての貨幣」 $G-W-G'$ 形式は「商品流通の最後の産物」としての世界貨幣の規定を媒介にしては論理的にみちびきだしえないものとして、資本形式の展開過程を抜きにしてただちに産業資本の生産過程の考察へと飛躍しなくてはならないことになるであろう。

すなわちこのような世界貨幣の考察における歴史的具体的な国内流通部面の複合体としての世界市場の把握と、流通手段を媒介とする商品流通において等価交換によって規制された単純流通の完成を想定する視点とは、相互に補足しあう同一の方法の表裏をなすものであって、後者における単純流通の理論的完成は商品流通のより以上の論理的展開を阻止し、しかも貨幣の規定の展開の必要性はかかる完成した流通界の複合体を、歴史的事象にたすけら

れながら具体的に措定するのやむなきにいたらしめたのであった。

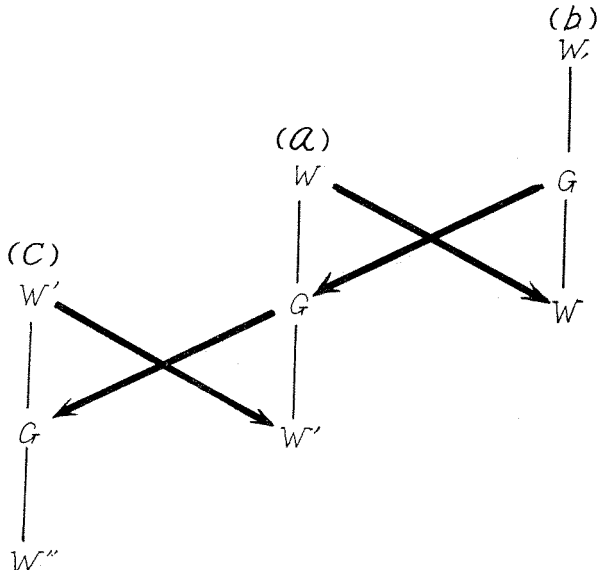
かくて商品流通の世界市場的関連から「貨幣の資本への転化」の必然性が要請されながら、その展開の前提となっていた商品流通の把握それ自体によって、かえって単純流通におけるその解明をさまたげられることになるというのが、『資本論』第1巻、第2篇の論理的錯乱の具体的様相であるとするならば、日高氏における、単純流通の一流通圏としての完成と複数の流通圏の存在の否定という商品流通の構造把握は、『資本論』における錯綜した論理の二面性の一側面を完全にきりすて、別の側面において純化したことを意味するものであった。しかし『資本論』におけるこの二面的論理が、すでにみたようにそれぞれ相互に補足しあう表裏の関係にあるとするならば、その一面を独自の視点において純化した日高氏の理論体系においては、『資本論』におけるとは異った様相においてその論理的展開の過程に新たな難点をうみだすことになった。

すなわち、氏の体系にあっては、単純流通における「貨幣の資本への転化」を $G-W-G'$ 形式の生成としてみちびきだすことが困難となるばかりではなく、およそ「貨幣の資本への転化」の要請自体を論理的に措定することが不可能となるのである。

氏は貨幣の章の末尾で、その資本への展開の要請を次のように規定している。「こうして外部からはいつてきた貨幣は、もはや商品流通の媒介をすべき W_1-G-W_2 の運動の中間に位置する貨幣ではない。貨幣としての貨幣を媒介として、貨幣から始まる新しい運動を展開するのである。そのことは必ずしも、外部からはいつてきた貨幣がつねに運動の出発点となるということでもないし、紙幣などが運動の出発点となりえないということでもない。紙幣が運動の出発点となったとしても、その根拠に、新しくはいつてきた貨幣をもたざるをえないことをいうのであって、こうして貨幣はヨリ多くの価値となるものとしての運動をはじめ、そういうものとしての資本となるのである。」⁶⁾

ここでは明らかに W_1-G-W_2 の運動と対比して、 $G-W-G'$ の運動の

第一次過程としての $G—W$ がとりあげられている。 $W_1—G—W_2$ という商品交換を媒介する位置においてでなく、 $G—W$ という過程をもって貨幣がその運動を開始するならば、これは次の段階における $W—G$ に補足されることによって $G—W—G'$ なる新たな運動形式を展開することになるというのであろう。もっとも $G—W$ という段階が何故必然的に $W—G$ なる過程によって終結せしめられなくてはならないかはしめされていない。おそらく $G—W$ の過程において開始されるということが、すでに $W_1—G—W_2$ における商品の売買と異っては、じめから W の使用価値をめあてにしてなされるのではなく、価値増殖の媒介手段としておこなわれざるをえないことを内包しているという理解がふくまれているのであろう。しかしすでに宇野教授によって明らかにされ、日高氏もそれを継承してとかれているように、本来商品流通は『資本論』で「商品の姿態変換」として規定されている $W—G—W$ なる形式においてあらわれるものではない。個別的に考察するかぎり、商品流通はじつは購買手段としての貨幣による商品の購買過程 $G—W$ としてあるにすぎず、その社会的な連鎖が次のような諸関連においてあらわれるにすぎないのである。



したがって商品流通も、またいわゆる貨幣流通も、これらの $G-W$ の社会的絡みあいの全体における商品乃至貨幣の持手変換の過程をさすにすぎない。(a)の手における $W-G-W'$ は、(a)が W を売って G を手に入れ、さらにこの G で W' を購買したという事実をさすだけであって、(a)の手において $W-G-W'$ なる商品流通が価値の変態として行われたというのではない。その点からいえば $G-W-G'$ の資本流通形式に対比すべき $W-G-W'$ なる流通形式はもともと存在しえなかったのである。いわゆる商品流通も、貨幣流通も、同一人の手中における価値の姿態変換としての資本流通とは根本的に異なる。それゆえたとえ世界貨幣が $G-W$ なる運動を開始するとしても、これは貨幣としての規定における当然の行為であって、このことがただちに $W-G$ の過程で補足されることによって $G-W-G'$ なる流通形式を必然的にうみださざるをえない理由とはならない。つまりこれはたんに G が原始的購買手段として流通にはいつてゆくという事実をさすにすぎないのである。さらにまたこの G が「流通圏における金の量を最終的に調節しうる」⁷⁾という役割をになうとしても、これもまた $G-W$ をして $G-W-G'$ の第一段階たらしめるものではない。要するに「貨幣としての貨幣を媒介として、貨幣から始まる新しい運動を展開する」根拠は、たんに商品流通の外部から G が $G-W$ の過程をとおしてはいつてくるということによってあたえられるものではないといえよう。

もともと貨幣は、商品世界に対して $G-W$ の過程をとおして現実に機能する以外にないのであって、その点からすれば商品流通内部にしる、外部からにしる、貨幣が $G-W$ の過程をとおして商品流通の現実的形成に参加することは、それ自体としては「貨幣から始まる新しい運動を展開する」契機をうみだすものではないとすれば、そして商品流通を『資本論』におけるようにしたがってまた日高氏におけるように、いわば完成された一つの流通圏として規定するかぎり、貨幣はあくまで $G-W$ の機能をはたすにすぎず、この貨幣が流通手段の量的調節のプールの役割をはたすことも、それ自体としては「ひとつの流通圏」という構造を変化せしめるものでないといえれば、流通内

部のあるいは外部からの $G-W$ の過程は、そのものとしては商品流通乃至貨幣流通にかわる異質の流通形態の開始を意味するものでないことはもはや自明であろう。

したがって日高氏の指摘される「貨幣から始まる新しい運動」なるものはじつは、貨幣の媒介する商品流通自体の根本的な全体的構造変化にその根拠をもとめる以外にありえないことになる。この点はさらに、この「貨幣から始まる新しい運動」の基本形態である「商人資本的形式」について考察すればなおいっそう明瞭となるであろう。

日高氏は、宇野教授と同様、その『原論』第1篇、流通論を第1章、商品第2章、貨幣、第3章、資本と区分し、資本の内部を、商人資本的形式、金貸資本的形式、産業資本的形式に分割する。そしてこの商人資本的形式の冒頭で「資本の概念」を次のように規定している。

「運動の出発点としての貨幣は、まず商品の購買にもちいられる。しかしそれが単なる流通手段としての貨幣とちがうところは、買われた商品が消費されるのではないという点である。消費するためでなく、再び売られるために商品は買われるのである。したがって商品は、使用価値が実現されるための存在ではなしに、再び売られるという過程における一姿態であるにすぎない。そして再び売られたら、かれのもとには貨幣がもどってきたということになる。こうして運動は、貨幣から出発して貨幣で終るというかたちをとったのであるが、その運動がかれにとって意味があるのは、出発に投下したよりもヨリ多くの貨幣を手に入れたというばかりである。なぜなら貨幣は、どんな貨幣であっても質的には何の変化もなく、量的にちがいうるにすぎないのだから。したがって資本の形式は $G-W-G'$ となる。」⁹⁾

貨幣を「出発点」とする運動においては、流通手段におけるとは異って、「消費するためでなく、再び売られるために商品は買われる」のであるとすれば、この相違はたんに $G-W$ の過程において運動が開始されるということに根拠があるのではなく——さきにみたように、流通手段としての貨幣においても個別的売買過程としては当然 $G-W$ をもって始まる以外にないのだから

ら——むしろ、 $G-W$ を逐行する貨幣がすでにたんなる購買手段として機能しているのではなく、それ自体において自己増殖する価値としての規定をにないつつ、その手段として $G-W$ の過程を開始しているという関係が指定されているものとしなくてはならない。「商品は、使用価値が実現されるための存在ではなしに、再び売られるという過程における一姿態であるにすぎない」というのは、すでに貨幣が自己増殖する貨幣という運動体として規定され、商品の売買過程はたんにこの運動体の過程的一契機にくみこまれていることを意味する。したがって問題は、自己増殖する価値(ここではまだ自己増殖する貨幣)という「新しい運動」が、すでに展開された商品流通と貨幣との関連からどのようにしてみちびきだされうるかということになる。この点はたんに過程が $G-W$ をもって開始されるということによって説明されうるものではないのはいまみたとおりである。 $G-W$ としてとらえるかぎり、単純な商品流通における $G-W$ も、資本流通における $G-W$ も、それ自体として異った規定性もちうるものではなく、後者はすでに $G-W-G'$ の一環として規定されていることを前提として、「買われた商品が消費されるのではないという」関係をにうことになるにすぎなかった。

したがって「資本としての貨幣」の生成は、たんに $W-G-W$ なる流通に対する $G-W$ なる運動の対比によっては解明できず、この $G-W$ が最初から $G-W-G'$ の過程的一段階であることを前提とすることなしには、 $W-G-W$ に対する $G-W$ の新しい意味も規定できないとすれば、「資本の概念」を展開するにさいしては、日高氏のばあいとはぎゃくに、当初から $G-W-G'$ 形式の必然的成立を前提としたうえで、その一構成部分としての $G-W$ の意義も明らかにせられるということになろう。

つまり日高氏の「資本の概念」の説明においては、じつはすでに成立した「資本の概念」を前提として、その内的諸関連を規定しているにすぎず、「貨幣として貨幣」からそれと区別された「資本としての貨幣」の成立は、論証過程をぬきにして一般的に前提されているものといわざるをえないであろう。

この貨幣から資本への転化の過程の論証の欠落は、日高氏にあっては商人資本的形式自体の規定において、なかんづくこの資本形式の「限界」の規定において、根本的な理論の難点を結果することになるのである。

すなわち日高氏は「商人資本的形式の限界」を次のように指摘する。「商人資本は、利潤を得るために投下されたのであったが、その利潤は、ある商品を買った価格とその商品を売る価格との差としてしか与えられることはできない。……しかも安く買う商品と、高く売る商品とはまったく同じ商品なのであり、その価値に変化があるわけではないのでて。だから商人資本は利潤を得ることができるということについての社会的な根拠をもってはいない。……だからもし利潤を得ることができたとしても、それは偶然的な事情に依存するのである。商人資本は、そのような偶然的な事情に依存することによってなりたつものでありながら、同時に、それが偶然的な事情をなくしていく傾向をもつものといえるであろう。すなわち、商人資本は存立すること自身によって、存立の基礎を掘りくずしていくものといえる。……こうして商人資本的形式は、その外部からこれを媒介することによって利潤率の均等化を実現すべき資本形式を必然にする。」⁹⁾

ここで明らかなことは、商人資本がその価値増殖の前提としているのは、流通界における同一商品の価格差の存在である。しかも日高氏にあっては、すでに「世界貨幣も諸流通圏を鳥瞰するような姿勢からでなく、あくまでひとつの流通圏の内部からの姿勢で説かれなければならない」かったのだから、この「商人資本」も当然「ひとつの流通圏の内部」において、したがって同一価値を中心として動揺する価格差をもつにすぎない諸商品を媒介するものとして運動することになる。商人資本の価値増殖の根拠が、この価値からの偏差をもつ価格の存在という「偶然的な事情」にはかならないのだから、商人資本によるその媒介活動は、この「偶然的な事情」自体を解消して、必然的な関係、すなわち価値関係へと流通界を編成していくとともに、同時に、自己自身の「存立の基礎を掘りくずしていく」ことになるというのである。

しかし商品流通はその成立の端初において、すでに購買手段としての貨幣

の現実的出動により、恣意的、「偶然的」な価格関係を、一定の客観的な水準にもとづく社会的な価値関係へと編成していく機構をもっていたはずである。価値尺度としての貨幣とは、まさにこのような購買のくりかえしによって、「偶然的」な価格関係を、客観的な価値関係へと転換せしめることによって商品の価値を客観的に尺度する貨幣の機能をさしているのであった。もちろんこのようにして形成された商品流通は、まったく価格差をもたない価値体系によって全面的に規制されるというのではない。当然たえざる価格の変動をとおしながらも、しかもそれを一定の客観的な価値体系へと収斂しつつある商品流通として形成されるのである。それゆえここで問題なのは、商人資本の成立の根拠をなす諸商品の価格差乃至価格変動における「偶然的な事情」と、貨幣の価値尺度機能の前提となっている価格関係における「偶然的な事情」とは、まったく同一の「偶然的な事情」なのか、何らかの質的区別をもった「偶然的な事情」なのか、ということである。日高氏においては「価格体系を異にする複数の流通圏を結ぶ」関係は、原理論体系の内部では措定されえないものとして、貨幣範疇においても、資本範疇においても、あくまで「ひとつの流通圏の内部からの姿勢」が固持されているため、この価格関係における「偶然的な事情」は、流通論全体をつらぬく同一不変な「事情」とせざるをえないことになっている。

しかし、貨幣が価値尺度機能をとおして、商品の価格関係における「偶然的な事情」を、商品流通としての必然的な価値関係へと編成していくかぎり「ひとつの流通圏の内部」においては、この「偶然的な事情」はたえず機構的に解消されつつあるものとしなくてはならない。商品流通がそれ自体自立的な運動を形成しつつ、流通手段の社会的な定量を規定することになるというのも、このような商品流通における必然的な価値関係の形成を反映するものにほかならなかったのである。

もともと原理論体系内部における商品、貨幣、資本の範疇的展開は、その基盤における流通関係の発展過程の反映以外の何ものでもない。貨幣の価値尺度機能の展開が、その媒介を必要とする商品関係における矛盾の形成を前

提とした、その解決の具体的機構をしめすものにはかならなかったとすれば、商人資本的形式の成立の要請と、この形式に媒介された新たな商品世界の運動機構の形成も、同様に商品流通における矛盾の、しかしすでにたんなる流通手段に媒介された商品流通におけるそれとは質的に区別されたより高次の矛盾の形成と解決の過程の具体的反映にはかならないのである。

価値尺度乃至流通手段の規定における商品流通の理論的规定を「ひとつの流通圏の内部」として固執して、そこにおける「偶然的な事情」を、何らの質的差別もなしに、ふたたび商人資本の媒介する流通界においてくりかえし設定するにすぎないとすれば、商人資本の「存立の基盤」も、たんなる貨幣の価値尺度機能の「存立の基盤」とまったく同質の規定をあたえられるにすぎないことになり、資本的形式の形成の要請も、またその「限界」も、正しく規定しえなくなるのは自明であろう。

問題は、購買手段としての貨幣による価値尺度機能をもってしては、ついに解決することのできない流通の矛盾をどのようなものとして設定し、「貨幣としての貨幣」と区別された「資本としての貨幣」によってはじめて解決される商品流通における「偶然的な事情」を、たんなる「ひとつの流通圏の内部」における「偶然的な事情」とどのような区別において措定するかにかかっている。

そしてこの問題の解明の中心をなす理論的範疇こそ、まさに「世界貨幣」の概念にはかならなかったのである。

- 1) 『資』 ① 257 頁。
- 2) 『資』 ① 279 頁。
- 3) 『資』 ② 283 頁。
- 4) 『資』 ① 226 頁。
- 5) 『資』 ② 312 頁。
- 6) 『原論』 42 頁。
- 7) 『原論』 41 頁。
- 8) 『原論』 41 頁。
- 9) 『原論』 47 頁。

4

すでにみたように『資本論』では、流通手段によって媒介された商品流通を、「正常的な経過」のうちに進行する「社会的生産有機体の量的編成」の流通表面として完成された「ひとつの流通圏」と規定するため、「交換価値の唯一十全な定在」としての「貨幣」の把握は、たんなる流通手段の量的変動に対する調節の機能へと解消せしめられており、「貨幣の概念に適合した」「貨幣の定在様式」たる世界貨幣も、「国内流通部面から歩みで」て「地方的諸形態をふたたび脱ぎすて」た「貴金属の元の地金形態」²¹においてしか把握されていない。つまり『資本論』における世界貨幣は、「価格の度量基準・鑄貨・補助鑄貨・および価値章標という、そこで生長する地方的諸形態をふたたび脱ぎすてて、貴金属の元の地金形態に逆戻り」したものと規定されているのであって、いわば国内流通と国際流通という流通領域の差異にもとづいて、貨幣の地方的流通制約性をあらわす鑄貨形態という「国民的制服」²²を脱ぎすてているか否かに、流通手段およびその他の貨幣機能と世界貨幣との根本的区別はかかっていた。世界貨幣とその他の貨幣機能との理論的区別は、国際流通と国内流通、地金と鑄貨形態という、あたえられた流通界における貨幣形態の技術的差異のうちに解消されているといっていよいであろう。したがって、この「世界貨幣」の存在基盤たる「国内流通部面」から区別された「世界市場」も、一般的に「国内的流通」に対する「世界市場的流通」として抽象的に規定されるだけであって、すでに単純流通として完成された「国内的流通」はこの「世界市場」に媒介されることによって何ら質的に異った新たな流通関係を展開することにはならないのである。

日高氏は「『資本論』や宇野『原論』」では「世界貨幣を、複数の流通圏を結ぶものとしてとらえる視点が、曖昧ながら存在した」とされているのであるが、「宇野『原論』」はともかく、少なくとも『資本論』では、この「複数の流通圏」なるものの設定は、流通手段を媒介とする商品流通においてすでに「ひとつの流通圏」として完結した商品流通が想定されていたことの逆転

した表現でしかないことに注意すべきであろう。つまりこの段階において、商品流通が「ひとつの流通圏」として完結してしまうかぎり、世界貨幣の媒介すべき流通は当然このようなそれぞれ完結した体系をもつ流通圏の複合体としてしか設定しえなくなり、世界貨幣はこれらの国内流通における地方的鑄貨形態から脱却した地金としての規定をあたえられるにすぎなくなるのである。たとえ『資本論』において「複数の流通圏」が想定されていたとしても——そしてこの想定は、日高氏の批判されるように、まさに商品流通の論理的発展としてではなく、歴史的表象にささえられて成立したものでないが——その諸流通圏における価格体系の差異自体は、世界貨幣の規定に対しては何ら積極の意味をもちえないことになる。というよりもむしろ、『資本論』ではおよそ「諸流通圏」は同質的なものとして「世界市場」の中に併存せしめられているだけであって、それら相互における異った「価格体系」の存在自体が承認されていないのである。そしてこのように、世界貨幣の把握が、たんなる貨幣の「国民的制服」の離脱に媒介されたいわば技術的規定に解消せしめられ、同時に世界貨幣の媒介する流通領域とその運動とが、たんなる等質的な「諸国民的流通部面」をその構成要素とする「世界市場」とそこにおける全地金の運動に還元されるかぎり、かかる世界貨幣の規定をとおしては、商品世界の商品流通としての完成とその限界の確認、およびその資本流通を媒介とするより高度の流通世界への発展は、論理的展開としてあたえられうべくもないことはすでにあきらかであろう。

じじつ『資本論』においては、第1篇「商品と貨幣」はこの世界貨幣の規定をもって完成せしめられるとともに、第2篇「貨幣の資本への転化」の説明は、「貨幣としての貨幣」に対して「資本としての貨幣」「 $G-W-G$ 」を無媒介的に前提とすることによって開始せしめられることになっている。しかも「 $G-W-G$ 」あるいはその合理的表現としての「 $G-W-G'$ 」は「直接に流通部面で現象する資本の一般的範式」³⁾として規定されながら、「純粋な姿態」における「商品交換」としての「等価物間の交換」⁴⁾を前提としては、一般にその成立が「不可能」⁵⁾とならざるをえないことになる。

「貨幣の資本への転化」は商品交換に内在する諸法則にもとづいて、展開されるべきであり、したがって等価物同志の交換が出発点たる意義をもつ」⁶⁾とされながら、じつは単純流通を前提とするかぎり「貨幣の資本への転化」は実現されえないものとして、結局労働力商品を媒介し、その「消費過程」とおして、つまり実際には「単純流通あるいは商品交換の部面から袂別する」⁶⁾ことによって、 $G-W-G'$ なる「貨殖の秘密」を「暴露」⁷⁾することにならざるをえないのである。つまりここではむしろ $G-W-G'$ なる「資本の一般的範式」は、「直接に流通部面」において「等価物同志の交換」を「出発点」とするかぎり存在しえなかったことが「暴露」されるのであり、商品流通から資本流通への論理的展開における不可欠な一環の欠落が証明されたことになるのである。

日高氏もこの点を批判して『資本論』では $G-W-G$ を $W-G-W$ と形式的に対比することから出発し、 $G-W-G$ が $G-W-G'$ でなければならぬことを説いたうえで、価値増殖の根拠を問題にし、流通では価値増殖がおこないえないことを明らかにして産業資本形式をみちびきだしている。しかし $G-W-G$ と $W-G-W$ との形式的対比はほとんど意味がないのではあるまいか。それは $G-W-G$ が $G-W-G'$ でなければならぬことをみちびくためのものであろうが、 $G-W-G$ という形式を問題にしなくとも、貨幣としての貨幣から当然 $G-W-G'$ をみちびくことができるのである」⁸⁾といっている。しかし問題は、『資本論』におけるように、すでに流通手段の規定において「ひとつの流通圏」を「等価物同志の交換」によって内的に規制された商品流通として想定し、貨幣としての貨幣をたんに流通手段の量的調節の機能においてのみとらえるかぎり、貨幣としての貨幣から $G-W-G'$ 形式をみちびく道は完全に遮断されざるをえないという点にある。

このような「商品交換の法則」に媒介される単純流通の「純粋な姿態」をもって、統一的な社会的再生産によって内的に規制された完全な流通表面とする『資本論』の方法は、日高氏も批判されているように「単純商品生産によって生産された商品が価値どおりに交換される」⁹⁾という理解を前提とし

てあたえられたものであった。したがって流通形態としての商品形態の考察においては「価値の実体を説くことを追放し、冒頭の商品はあくまで資本主義社会の商品でありながら、その生産過程から抽象されたものと考え、資本の生産過程にいたってはじめて価値の実体を説」¹⁰⁾くことが必要であるとすれば、かかる流通形態の流通形態としての規定づけは、たんにいわゆる価値形態論の展開にとどまることなく、いま問題としている商品流通の構造把握に対しても根本的な視点の転換を要請することになるであろう。

すなわちたえずくりかえされる購買手段としての貨幣の機能をとおして、商品流通はその連続性と統一性を維持しつつ、一定の価格水準を形成することになるのであるが、そしてまた商品流通はこのような統一的商品流通として主体的に自己を確立し、流通手段としての貨幣の変動をさえ自己の変動の反映たらしめることになるのであるが、しかもこの統一的な流通主体は、いまだなお生産過程によって基礎づけられた真の意味での社会的統一主体の運動の反映たりえないため、その連続性と統一性の確立は、この商品流通に対して外部から対立する貨幣としての貨幣の媒介を必然的に要求することになるのである。つまりたえず変動しつつある商品流通としてはじめて商品流通はその現実的運動機構をあたえられることになるのであるが、このようにたえず変動しつつある商品流通を、その背後における生産過程や、あるいはその上部構造からする「国家的制服」から抽象して、たんなる流通運動として把握するかぎり、この商品流通はその価格体系の変動に応じて、いわば異質な商品流通が貨幣としての貨幣を媒介として結合されることによって、その連続性、したがって統一性を維持しているにすぎないことがあきらかとなる。商品流通がこのように価格体系自体の変動を内包しながら展開するということが、異質な商品流通の貨幣としての貨幣の媒介による相互連結にはかならないとすれば、蓄蔵貨幣にしろ、支払手段としての貨幣にしろ、それらはすべてこの一定の価格体系をもつ商品流通を別の価格体系をもそれへと結合せしめる商品経済的な特有の機構を意味しているにすぎない。つまり流通手段の規定において一般的に「ひとつの流通圏」として想定された商品流通

は、じつはさらにたちいった媒介機構をとおして考察するならば、いわば「複数の流通圏」の相互関係としてしか存在しえないことがあきらかとなり、この「複数の流通圏」の対立関係のもっとも発展した様相が、世界市場における世界貨幣を媒介とした価格体系を異にする諸流通圏の対立として規定されることになるのである。

かくて蓄蔵貨幣・支払手段・世界貨幣という貨幣範疇の展開は、「ひとつの流通圏」として想定された統一的商品流通が、その現実的運動機構としてはじつは「複数の流通圏」の対立と相互関係によってはじめて「ひとつの流通圏」に統一されるべき、内的分裂をふくむ商品流通にすぎなかったことが明らかにされてくる過程なのであった。世界市場と世界貨幣の範疇は、まさに価格体系を異にする「複数の流通圏」の対立が対自的に措定されたことを表現するものであって、ここに商品流通は、たんなる流通手段でもなければ、貨幣としての貨幣でもない、それ自体運動しつつ自己増殖する資本としての貨幣によって媒介されるのでなければ、その統一性を現実的機構をとおして達成することができない異質な流通圏の分裂として、その商品流通としての自立性の限度を暴露することになるのである。

価値形態論が貨幣の必然性の論証過程であったのに対して、貨幣形態論はそのような意味で全体として資本の必然性の論証過程をなす。したがって、世界貨幣範疇はその「定在様式が、貨幣の概念に適應した」完成した貨幣であるとともに、それ自体「貨幣の資本への転化」の移行規定をなすのである。

つまり世界貨幣を基軸として対立する価格体系を異にする諸流通圏は、この世界貨幣を前提とする独自の価値の運動形式による媒介をとおして、はじめてその総体的関連と統一性を具体的に達成し、商品流通をして資本流通の基盤たらしめることによって、はじめて商品流通自体の運動機構を現実的に完成せしめることになるのである。

『資本論』で、世界貨幣がいわば「世界商業」における貨幣的側面としてとらえられていることの理由もここに存する。つまり世界貨幣範疇を媒介と

してあきらかにされた「複数の流通圏」の対立を前提とし、その積極的な媒介機構を描定しようとするならば「世界商業」としてのG—W—G'形式をみちびく以外にありえないのである。しかし世界貨幣をすでに成立したG—W—G'形式の一契機としてとらえることはまだできない。世界貨幣はあくまで、貨幣としての貨幣の最終完成形態であって「複数の流通圏」に外部から対立し、それらの対立関係を自己の規定のうちに集約する貨幣にすぎない。

このようなものとして「世界貨幣」は、同時に「資本としての貨幣」の形成を要請する移行規定をなすとともに「資本としての貨幣」成立の完全な条件を自己の規定のうちに総括した範疇として、「貨幣としての貨幣」の概念の十全な完成形態たる意義をあたえられるのである。

- 1) 『資』 ① 277 頁。
- 2) 『資』 ① 250 頁。
- 3) 『資』 ② 297 頁。
- 4) 『資』 ② 301 頁。
- 5) 『資』 ② 313 頁。
- 6) 『資』 ② 328 頁。
- 7) 『資』 ② 327 頁。
- 8) 『原論』 44 頁。
- 9) 『原論』 14 頁。
- 10) 『原論』 15 頁。